

巻 頭 言

「大学院研究科開設にあつて研究雑誌に期待すること」

Hopes for the OMC Journal of Nursing Research at the Opening of the Graduate School of Nursing

看護学部長 林 優子

大阪医科大学看護研究雑誌は、看護学部が設置された平成 22 年に初刊が発行され、今回で第 4 巻の発行に至りました。平成 26 年 4 月より看護学研究科（前期・後期課程）が設置となり、それに伴って教員のみならず大学院生による投稿論文も徐々に増えていくことが予想されます。また、研究雑誌の研究論文の質を担保していくために、査読の質を高めることも重要になり、編集委員会はさらに責任ある役割を担っていくことになるでしょう。

研究活動には研究資金が必要不可欠です。研究者は競争的外部資金獲得のために必死です。また、獲得した研究費を使用して行う研究が、自己の研究業績のための研究にとどまらず、研究成果を広く教育や実践の場に還元し、社会のための研究として発展させていくことが重要になります。そのために、研究者としてのリサーチマインドや、研究成果を社会に発信していくための手腕が問われてくるでしょう。

そんなことをあれやこれやと考えている折、“再生医療につながる世界的な大発見”のニュースが飛び込んできました（平成 26 年 1 月 29 日）。iPS 細胞や ES 細胞とは異なる万有細胞(STAP 細胞)を 30 歳の若き研究者小保方晴子さんが開発したという大ニュースです。何が発見なのかをネットで調べるうちに、その意味が分かりました。STAP 細胞（この研究で命名された）が、生物学の常識ではありえないことを覆す発見だったということです。

「体の細胞は、体のそれぞれの臓器などに分化すると、万有細胞に戻ることはあり得ない。」とする何百年の細胞生物学を覆した研究成果だったのです。Nature に受け入れられまでに最初の実験から約 5 年を要し、しかも、今回の論文は再々々提出でやっと受諾されたのだそうです。彼女のひらめきや研究者としての信念の強さ、権威的な細胞生物学にこだわらない斬新的な視点を持っていたことなどが述べられていました。私が最も印象に残ったのは、理化学研究所副センター長の「彼女は細胞の心を読む目がある。その心を読む目を持っていないと普通ではできない。」とのコメントでした。

これら一連の記事は、私たち研究者に多くの刺激を与えてくれたように思います。顕微鏡を覗き込む小保方晴子さんの「細胞の心を読む」目は、私たち看護研究者の「患者の心を読む」、「家族の心を読む」、「地域住民の心を読む」、「あらゆる人の心を読む・・・」の感性に他ならないでしょう。研究者には、「想像 imagination」、「創造 creation」、「ひらめく思考」など個人の能力と、研究を支える研究的環境や仕組みが重要だと思えます。今までの看護研究の弱点は、大学教員も実践者も多くの研究を行ってきたけれども、その成果が小さな範囲内にとどまっていて、ケアの体系化になかなか至らないことだと言われています。

昨今の看護研究の動きを見ていますと、看護学における研究は、大学と施設との共同研究や他分野と連携協働した学際的研究が増えています。そして、他科学との融合を目指した看護学におけるトランスレーショナル・リサーチが展開される時代が到来しています。本学においても、看護学部と大学病院看護部との研究連携を強化し、実践の場からニーズを把握する協働作業を行いつつ、共同研究を進めるための仕組みを作ることが課題だと思われます。本学は、関西大学と大阪薬科大学と連携しており、学際的な研究を推進させる土壌があります。三大学医工薬連環分野のなかに看護学を位置づけ、医工薬看護連環分野の融合をめざす研究活動も可能になってきました。

本学部の教員や大学院生がさまざまな人材や研究的環境を活用し、看護学の知識体系や看護実践の改善・開発に寄与できるような研究活動を積極的に行い、大阪医科大学看護研究雑誌に多くの論文が投稿されることを期待しています。